

笈摺草紙

泉鏡花作

—

眞先に立つたのは、黒と茶と鼠とを、縦に棒縞のお召縮緬の八尺袖。藤色の替裏、此袷に、藍鼠地に桃色と紅で牡丹を染めた友染の長襦袢を重ねて、派手で姿。唐獅子を白で抜いた緋縮緬と縺子を打合せの帯、鼠の平打のパチン留。髪は桃割に結つた、年の紀は十六ばかりな綺麗なのが、右の手に端を持つた白地の手拭に、中指の尖を繫いで引張合ひながら後へ續くのは、二十一二の新姐で、一樂の袷の裾を端折つて、水淺葱の下メをしゃんと結んで、下長く、白い脛に緋縮緬の蹴出を纏つて居る。後から結城の衣服に淺葱の長襦袢を襲ねて、博多と黒縺子を打合の帯、丸鬚の横顔を見せたのは、二三度素人に成つたといふ風、何處か所帯染みた倅がある。

右いづれも赤緒の雪駄、二枚裏で歩を悩み、五月霽で日のあたる坂の山路を登つて来る。

「最ちつと急いでお歩行ッてば、焦れつたいねえ。」
と前に立つた一番少いのが邪険に手拭を引いたの
で、片端に縋つて中に立つた、首へ環にして緩く手
拭をかけて居る投島田の新姐は、煙の立つてる煙管
を手にしたまゝ、ぐいと手繰寄せられて、思はず前
へ出たので、いま吸つけようとして雁首を押着けて
た殿の老妓は、不意に火皿を引手繰られたから、氣
抜けのした状、姉さん被の口許に吸口をあてがつた
まゝで立停まつて、

「あら、」と云つたが黙つて見て居る。

「亂暴ぢやあないか、酷いよ。」と、新姐はなく
れた身體を坂道で踏据ゑた時、腹立たしげに云つた。
少いのはぎましたもので、

「だつてさ、焦れつたくツて仕様が無いんだも

の。」

「何が焦れつたいんだよ。セツセツ云つてながら、
何だね、お前、そんなに急がなくツたつて可いぢや
あないか。」

慳貪にたしなめると、少いのは笑ひながら、

「だつて、
「とうつむいて其手拭のさきを
捻る。」

「だつて何うしたのさ。」

「喜いちやんはね、そら何なんだわ、お前。」と
老妓は考へついたやうに、口から其拍子抜の煙管を
放して、これを乳のあたりへ構へたとき云つた。

「早く行つて、また旦那に負ぶさらうと云ふんだ

アね。」

「あゝ左様
「と何か合點んだ顔色で、老妓
と目配した目を振向けて少いのゝ顔を見る。」

「だけど、今ぢやあ何うだか不知、ねえ喜いちや

ん。」

「何が、え、姉さん。」

「何がツて、お前、蓑岡の若旦那はお亡なり遊ば
したからさ。」

「は、だからお墓詣をするんぢやありませんか。」

「其だからの事だね、お前何時でも甘え散らして、
初中あの若旦那に負つて貰つたらう。」

「喜いちやん惚れてたんだわ。」と背後から聲を

懸けると、又中のが引取り、

「だもんだから、又今日も負つて貰はうと思つて、それで那樣にさつさと急ぐんだらう。だけれど、何うだかねえ、亡くなつた方のこつたから、もし負つて頂かれないと、誠にお氣の毒様見たやうなわけのもんだからねえ。」

「それで、あの、一寸相談をかけて見たのよ。」

「喜いちやん、何うだい、ほら、こんな風に、と背後から負はれかゝると、眞顔で眼を睜つて聞いて居たのが、身もだえしてふりもぎつた。」

「嫌だ、私。」

「でもさ、信が籠ると恐しいもんだからね、また思召に合つて、幽霊に成つて出てお見えなさらないとともに限らないから。」

「そんなに氣落する事は無いよ、喜いちやん。」
と中のは背から負はれ懸つたまゝで居た。

「嫌なこツた。」

「あれ、急に薄情に成つたぢやないか、あんなに可愛がつて下すつたものを。お前、お亡なんなすつたつて、そんな嫌なこツたなんて言はうもんなら、それこそ眞個にお怨みなさらうも知れないよ。」

「だつて晝間ぢやありませんか。」と、少いのは言消さうとする。あとの老妓は、ずっと寄つて、

「でも山の中だし、御覽な、谷も、崖も、峯ン處も、青葉や、草で、一面に蒼青だ。赤いものはお前たちの襦袢位なもんぢやあないか。よならぬ時分だから、人ツ子一人居ようではなし。」

ずつと奥山おくやまになれば、又丁またちやうたる伐木ばつぼくの音おとも聞えよ
う。市まちから十町じちやうとは隔へだたらぬ、郡こほりの境さかひの一座ざの岳をか
で、蓑岡山みのをかやまといふのである。持主もちぬしであつた蓑岡みのをかとい
ふのが、此こゝを開拓ひらいて、我わが名なの附ついた都みやこにしよ
うと、此處こゝの谷間たにあひ、彼處かしこの峯みねへ、堂だうを建たてる、寺てらを拵こしら
へる、思切おもひきつて小ちひさな芝居しばあひ小屋こやも築きついて見るで、家いえ
も出来できたし、茶店ちやみせも出でた。地ぢならしだ、棟上むねあげだ、建こん
立りふだと、三個所かじよの廓くわわを狩催かりもよほし、藝妓げいしやを勝すぐつて、水みづ
縮緬ちぢりめんの襷たすきに、緋縮緬ひぢりめんの長襦袢ながじゆばんで、一昨年さくねんの青葉あをばの
頃ころは、毎日玉まいにちたまをつけて練出ねりださせた。これが花はなで、押おし
懸かける見物人けんぶつにんが、田樂でんがくを焼やいて騒さわいだが、彼かれが故人こじん
になつた後は、人口じんこうの少すくない、殊ことに一年ねんの内うち四分ぶんの二
以上いじやうまでは、雨あめと雪ゆきと霰あられと、曇天どんてんとで持切もちきつてる地ち
方うであるから、此山このやまは開ひらけなかつた。で結果けつぐわは其そのす
べての建物たてもののあつたあとが、三年ねんと立たたぬ内うち、悉ことごとく
扇あぶぎヶ原はらだの、題目堂だいもくだうだの、餅投もちなげまつ松まつだの、襷たすきヶ岳をかだの
といふ急拵きふしりへな稱となへながら、ものゝあはれな古跡こせきにな
つて、他ほかにつかひ道みちはないのであるから、いま女達をんなたち
が蹈ふんで居ある土つちの中なかには、去年きよねんの秋あき土葬どさうにした蓑岡みのをか
の主人しゆじんで、山下やましたの寮れうの若旦那わかだんなといつた美男子びだんしの、生々なま々
しい死骸しがいが、生前せいぜん一時豪遊ごうゆうを極きはめて、其驕者そのけうしやの一いの

手段であつた、此蓑岡山の頂の下に横はつて居る。

麓は西北に展けて、裾廣がり、左右へ果のない、六十萬石の田の淺翠。又海が縹として片帆が見える。空も拭つたやうではあるが、其年諸國に天變と地異とがあり、豫言が盛に行はれて、槍が降るわ、風が吹く、海嘯が寄せると恐れて居た。其五月雨の頃なので、樹立一つで目の届かぬ、葉隠れの空、峯の裏、何處に、紫か、朱か、緑錆か、人を奪つて去るやうな恐しいものゝ色が潜んで居るかも解らない。眼に映ずるものは、此時彼等の目に唯青葉、若葉、緑の草で、風もない、森とした、此單調な蒼いのが、あまり日が明いから暗いやうである。

山が淺い、東南が市に面南して居て、麓の横町の周圍には、豆腐屋が通つて居る。八百屋が荷を下して居る。トある二階窓が開いて居る。小兒が川縁で摘草をして居る。町中に挟つた花街には、三味線弾いて唄つても居れば、現に三人のうはさぎをして居る朋輩もあるのだけれども、三人は淋しくなつて、しばらくの間皆黙つたのである。

「だもの、書だつて。」
と老妓はあたりを見ながら云つた。此時は實際少
いのを遊ばうための串戯ばかりでは無かつたらしい。

「出ないとは限らないわ、何だか出さうだ。」と
仕方なく断念めたやうなものいひ。此の新姐が手の
煙管からは、煙が立つて、脈々と山懐の草の中にやゝ
動いてゐた。

「皆みんながをかしく成なつたぢやあないか。喜きいちゃん、お歩あるきな、何どうした。」老妓らうきは開ひらいて立直たちなほつた。

おつかなびつくりで、少わかいのは進すすみさうにもしないの、

「さあ、喜きいちゃん。」と背せなから離はなれて、新姐しんぞもまた急いそがし立たてる。

「仕しやうがないぢやあないか。世話せわがかゝるツたらない、先刻さつきや、セツセツてセツつくし、何どうしたのさ。」

「だつて、恐こはいもの、姉あねさん、いろんなことを言いつて。」と聲こゑも穩おたやかでない。

「さあ、お行ゆなさらないか、立たつてなすつちやあ不可いけませんぜ。あい、馬うまだ。一ひと條路ぢぢでござい、先せんさまからお早はやく。」と路みちをせき留とめられて立定たちよどむ。

これは一足後ひとあしおくれに同伴ともをして來きた、壮わかい者しで、半纏はんてん、股引もひき、白足袋しろたびの雪駄穿せつたはきで威勢いせいの可いいのが、供養くやうの塔たふ婆ばを一本ほん、山路やまみちと平行へいかうの、うしろさがりに長ながくかついで居ゐて、

「え、もし、お前様方ア何をこだはつて居なさるんだ。急いで行つてお上なさい。寮の若旦那お待兼でさ。」

老妓は慌しく一寸銀煙管でおさへ、

「叱。源どん、お前なほ不可なくしまつたぢやあないか。お待兼だなんていふから、其で皆が寤んでるんだよ。」

「何だつてね。」

「いゝえ、幽霊が出やしないだらうかつて相談をして居たの。」と新姐は言つた。

「はゝはゝ、景氣の可いことを言つて居なさらあ。死んだ人が幽霊になつて出てくれりや世話あねえ。眞個でさ、旦那が幽霊にでもなつてあらはれて下さつて、おい、源やといふ聲が懸りや、此方アいゝ目が出るんです。盆の心配なんざ為ないんだけれど、あゝ仕方がないや、無駄は止して急ぎませうぜ。お前様方の歩行んぢやあ、いくら日が永えたつて追着きません、此頃のお天氣だ。」

と若い者は、眼をくる／＼とやつて空を見て、

「曇ると雨だ、さあ、あよひなさい、どれ草分けをしようかね。」と塔婆をかついだ肩を入れかへ、路傍の叢を踏みながら、竝んだ二人の横手を擦り抜けてツト前へ出る。これに誘はれて歩き出したが、皆滅入った顔色、むだも言はないで神妙に後からついて登った。

此の坂三町とは行くまでもない、松の葉の落溜る處、やゝ坦くなる坂の上り口、これから次第高な廣場で、例へば原を斜めたやうな墓地にならうといふ、其取着一軒、山番の小屋がある。

掘立の四本柱で、假屋のやうに拵へた、去年の雪垣はまだ取りはづさない、其儘で、雨風に曝された板戸の、隙間だらけなのが四枚。危く倒れさうになつて立つて居る。これが小家の正面で、向の峯から、まおもての日向で、聳つた紫雲英を一面に二坪ばかり透間もなく乾してある。

件の墓參詣四人の一行は、若い者がさきに立つて、此處まで來ると、珍らしい、莖がなえて白くなつた、

此花の色の、干からびながら赤いを見たが、恰ど
淡雪で埋むだやう、戸口に行かうとする路も無かつ
た。

見ると人の居る氣勢もしないで、板戸を透かす節
穴の裏は皆暗い。

「え、誰も居ねえのか、こゝで鍬も借りようし、
「お花も買はうと思つたのに。」

「はてな、何處へ行つたらう。」と四人立亂れて
イむで、姿を人違ひに、あとさきを見まはすと、小
高い見晴の丘の裾で、時ならぬ人影を認めたが、小
松原の中へぬつと立ちあらはれた親仁があつて、の
さ／＼と上から下りて来る。

四

「親仁、おゝい、親仁や、」と若い者は廣々とある山の中へ、張上げた聲を懸ける。聞えたでもなし、聞えぬ？ でも無い。親仁が少し前屈みになつた、脊の倭い形は、段々に近づいた。

草色のどんつく布子に、同一色の繼はぎの半股引、袂れ／＼になつた小倉の固い帯を克明に尻の突さきに結むだのに、たばねた藁を一束、木剪刀を挟み添へて、小さな斧をいかつげに横へた、手には竹箒を持つて居る、何か、植木屋と、木樵と、馬方を一人で帯にしたやうな身ごしらへ。眼のふちが赤くたゞれて居るので、日向が眩いのを、眉毛が光線を遮る蔭から、細くしば／＼瞬いて、間近になると、立停まつて、瞼で嘗めるやうに一個一人瞻つた。

「えゝ、ござりませ。」

「むゝ、親仁、久濶だ。」

「はい、あり難いことに晴れました。これは姉様達ようこそ。」

「旦那のお墓詣に來たんだよ。お爺さん達者で結構だね。」

「はい／＼、」と云つて、言はれた言をのみこんだ顔をする。

「一寸休まして貰はうねえ、」 「私、水が飲みたいの、」

「種々なことを言ふよ。」

「生憎茶はござりませぬが、水ならば今朝汲込みました、澤山まゐりませ。」と跣足であつたかさうに、紅い草の堆いのを柔かく踏しだき、片手に箒をついたまゝ、皺びた赤黒い、掌の生白い、大きな固い手を戸の合目に掛けた、親仁は中腰に成つて力を入れると、板戸はかた／＼と鳴つたが、外づれて、音もしないで、生乾の草の上へ沈んだやうに黙つて倒れた。

「おい、」と懸聲をして、親仁はゆつたりと踏み、板戸をわきへ搔遣りながら、箒を持つてるのに係はらず、手で草を押分けて、

「さあ／＼、」

「御免よ、」と若い者は一足ひよいと飛んで、廂

へ彼の塔婆を立懸ける。

板戸の内は横に長い平土間で、たゞきばなしの高
低が多い。密を突込んで二ツ、薄暗い處にならべた
花桶も、兩方へ傾いで居る。向う一面の框、片端を
四角に取つて、四疊ばかり、其へ筵を敷いてあるが、
筵から芽をふきさう、誰もお客になつて坐るものは
ないのであらう。框の端は板縁の様になつて居る、
こゝへ一列にならんで皆長襦袢を閃めかし、白い足
を踏揃へて、赤い緒の雪駄を六つならべて、腰を懸
けた。

「煙草の火でも進ぜましょ。どれ／＼。」と親仁
は身を起して入つて来て、片隅に据ゑてある黒燻り
の土竈の下を覗く。

若い者は塵を拂ひながら笑ひ出して、

「何時焚いた火だ、親仁あん、朝の御飯を拵えた
おきが正午過まであるものか。」

親仁は竈へ天窓から入つて居る、チト籠つた聲で、

「はあ、さうだっけか、御意ぢや。」

「は／＼／＼は、さうだつたてえ奴もないもんだ、

其それともありますかい。」

「見み當あたらねえさ。」

「何どうだ、此この様子やうすぢやあ、汲みる立たの水みづが湧わいてさうだ。喜きいちゃん、冷さめない内うちにあがんなさい。」

「嫌いやだ、私わたし、ぼうふらが居ゐさうだわ。」とうすツ氣き味みの悪わるい目めをつける。煤すすだらけの天てん井じ裏うらの蜘蛛くもの圍ゐを白しろく見みせる光あかり線せんがさして、ほこりで蓋ふたの白しろい釜かまをかけた其その土つ竈へにならべて、手て桶をけが一個ひとつ、流ながはないから、直すくこゝで煮に焚たきをするので、土ど間まのじく／＼と濡ぬれた處ところに置おいてある。少わかいのはぢつと見みて、

「ねえ、姉ねえさん。」

「今いまに蚊かになるから御ご覽らんなさい。」と、新しん姐ねは手てに持もつた銀ぎん煙ぎ管せを前まへ髪がみの上うへへ投なげて、くるりと廻まはる處ところを宙ちゆうで受うけた。

「あい、來きた、よい／＼。」

五

「人の氣も知らないで憎らしいねえ、咽喉が渴いで、仕やうがないんだもの。」

「私も飲みたくツて、と、いま煙管の小手しらべを御覽に入れたのが、脣をゆがめて胸を叩く。」

「そら、御覽なさいな。姉さんも飲みたいんでせう。」

「あゝ、だけでも、今朝御飯を焚いたおきを探すんぢやあ仕やうがない、此方アぼうふらが居たつて可いんだけど、水で煙草はのめないしねえ。」

「何を言つてるのさ、つまらない。」と老妓は二人を制して、

「火打石でも借りようぢやないか。」

「そんだったら早やお易い御用だ。」

親仁は蘇生つた心持になつて、漸く竈の中から天窓を出し得た。すぐ釜の蓋にのせてあつた、石、火打鎌、ほくちなんど、大方かうして置くと濕らないからであらう。三つ道具を左右の手に取つて、

「待たつしやい、打つて進ぜます。」

こつりとやる。眼がたゞれてる上に細いので、力チリと打はづしちやあ、焦れもしないでまたカツチリ、果しがないので、若い者は焦込むで、

「私が打ちやす、」と引奪るやうに道具を取つた。

折角箒まで下に置いて打ちかけた、かゝる好意を

無にされた親仁は、手持無沙汰になり、眼をしばたゝいて空く指の先を眺めて居たが、

「どれ、水を汲みかへて来て進ぜよう。むかひの

題目堂の清水は甘露ぢやぞい。釣鐘はあるけれどお

住持はござらねえ、空寺だもんで、毎朝、日朝様へ

俺お初穂を汲んであげる。其代清水は俺許のも同じ

ことぢや。へゝゝゝ、中に釣鐘の影法師が映る山の

井ぢや。まあ、飲んで見ツさりませ。」

と釣鐘の大きさは、身を反らして胸へ抱へる位にして見せて、威張つて手桶を引さげた親仁は、腰を屈

めて足に力を入れて、獨言を云ひながら、てく／＼と土間から出て行く。

「こんな處に一人住をしてる人だ。何處か變つて

らな、「と若い者は指のさきの火奴を吹いて、フツ／＼と息をかけながら摘むで出した。

「はゞかり、」と云つて吸ひつけた老妓は、一息のどかに吹いて、

「むかしから氣の可い爺さんさ。寮の若旦那が家に御先代の親御から奉公めた人だつて、もう七十餘だらうねえ。かうやつてお墓守までして居りや、大概な者ぢやあないやね。ねえ、忠義ぢやありませんか、まつたくだ。悪く氣の利いたものによ出来ない事だ。」

「はい／＼畏りました、」と新姐は莞爾する。

「馬鹿におしでない。お前けふは御命日だよ。ちと神妙に致すが可からう。」

と煙管をボンと落して老妓は兩膝に手をついたが、思ひ出したやうに、

「あゝ、ほんとに串戯いつてるんぢやあなかつた。喜いちちゃんお前水を呑むんなら、増さんとあとからおいで、私ア一足さきへ行つて、お座つきでも濟まして置くから。」

斯ういつて帯を探り、四に疊んだ白紙の間から小さな珠數を出して、チヨイと頂いて手に取つて、老妓は立たむとして戸外へ向直ると、戸の外へ来てイんだものがある。

光の射す山の翠の中に、こゝに敷いた紫雲英に踵を入れて、恰ど此時来て、いま此方を見て立停まつた、同時にのツそりした、足の運び、たけの高い身體を大跨にづか／＼と来て、其の背後に成つて齊しく立停まつたのは、風のかはつた、見馴れない漢の、年紀は三十二三と見えた。

の漢を振返る。

「え、御一服、それが可うござります。」
と入交つて前に立ち、つか／＼と戸口に臨むだが、
四邊を見廻はして猶豫つて居る。慙ういふ時は、何
者か見て取つて、お掛けなさい、入らつしやいまし
を言はねばならぬ。

親仁は空寺の山の井を汲みに行つて居ないのに、
居合はせたはどの者は、留守といふでもなく、いづ
れも勝手の知れぬのであるから、唯きよろ／＼する
ばかり。

取着が悪いので、入り兼たものらしい。

皆が黙つて思ひ／＼に、只管顔と顔を瞻つて、遣
場に困つた眼の行く處、小松原の中を手桶を提げて、
親仁はその／＼と歸つて來た。

「え、そら汲むで參りました。」
言ひかけて、件の嘗廻すやうな細い眼色で、少時
の間行つて來た、少時の間に、天から降つたか、湧

いたのか、珍らしい人が新らしく来て、自分を待つて居たやうに感じらるゝのを思ひかけず見たのである。

法華で、下總から出る中山派の巡禮は、團扇太鼓と小撥とを持つて居るが、此千個寺詣の手は、空しく無意識に垂れて居た。扮装は同一で、脚絆手甲、草鞋、足袋穿。婦人と見え、爪さきが反つて、踵の可愛い、すらつとした立姿で、袷の下の乳のあたりを鎧つて、白の頭陀袋を懸けて居る。背には笈、真中に打つた劍形の御符の札は、頸あたりに真すぐに、しやんと立つて凜々しかつた。

天窓のさきから爪尖まで、親仁はつく／＼と視めながら、うつとりとしたやうであつたが、落すが如く、其手桶を下すと、身近に寄つて、紅い花の上へ、股引の足を折つて、片手を地について一膝ずり出したが、顔をあげて、立つた人の向脛のあたりへ跪いて、笠の中を差覗く。

艶かな鬢のふツさりして、前髪の亂れかゝつた、

薄暗い笠の中に、眉は鮮である。

鼻筋の通つた、色の白い、めつきり瘦の見ゆる、
俤はやつれて居るが、氣高い、品の備はつた、緊つ
た、紅の蒼のやうな口許が、此時わづかに和むと見
上げた。清い、凜とした瞳が動いて、うつむきざま
に見おろした、少し曇つた月夜に肖た、憂を帯びた
下向の顔を、親仁は何で忘れよう。世に亡き蓑岡の
主人が生命を賭けた戀女房で、山下の寮に住むで居
た、紫と云つた美人である。と言へば顔は見ないま
でも、聞いて知つて、こゝにあるはどの者は皆忘れ
はせぬ。

慶應元年、上野の戦争にさきだつて、江戸は修羅
 の巷となる由、豫め騒いだので、紫の一家は、両親
 と、兄と嫂、嫂は江戸の生でない上總のもので、嬰
 兒を持つて居た。此乳呑兒と、犬張子と合乗で駕籠
 一挺。紫十六と云ふ時、厚裏の雪駄を赤い切で結へ
 た旅装束のまゝ横に乗つた一挺、都合二挺。両親は
 老人で二人一ならひに馬に乗つた。兄は步行立で、
 妻のと、妹のと、交る／＼駕籠脇に引添うて、別に
 小荷駄馬一頭。大方の諸道具は前に三度から廻して
 置いて、これに積むだのは家の寶、金春流の能の大
 鼓打であつたから、シテワキに朱を打つた謡の本、
 家元から皆傳の巻物、鼓の類、ほかに紫が愛翫して、
 本陣へ泊まる直ぐ蓋を取つて見ようといふお雛様、
 五人囃の能人形、小さい洞燈、江の島貝細工の小屏
 風、箆笥、鏡立、足高の夫婦膳、蒔繪の對で掌に乗
 りさうな、一式取揃へて嵩張つた箱が二個。田舎源
 氏、大倭文庫、白縫物語、と其から小倉百人一首、
 大形の古代繪で、一枚毎に吉野紙で間をした歌がる
 た。紅猪口、白粉刷毛、鬢水入、玉くしげ、疊紙、

桐壺黄金砂子の香箱まで、紫が袖の薫を留めた、指の爪紅のついた品物は、残らず荷作にして、直ぐ駕籠のあとについて居た。

別に手廻の入用のものが多い。費を省いて小荷駄一頭なら、手遊や、慰物は措いて外のものを積んだらばと、兄と嫂は不足をいつて澁つただのだけれど、男五人、女四人、はじめから九人もあつた。紫は父親五十四、母親四十四の時の末ツ子であつたから、喩にもいふ掌の珠、簪の花なり、豫め兵亂を避けて、舞の舞臺のあつた、下谷黒門町の邸を開いて、田舎へ落ちようといふ時、矢玉が飛ぶからと言つてをどしても、雛の傍を離れないで、くさ草紙や、歌がると、紅猪口と一緒にでなくツてはと、あどけないことをいつてむづかつたわがまゝを、可愛さに眼のない両親は、唯莞爾顔で聞き入れた、好の衣裳を襲ねたまゝ、ピラ／＼の簪、高島田、胸高の帯。ふツくりした懐中から、箱せこ簪の紅の總がしツとりとしてうつくしい。衽のあつい、きりツとした、武家の風にな、品は能くツても藝人の好、町家の狭な處を取まぜた、眼さむる姿で、塗骨の銀地の扇を持ち、裾を

ば引あげもしないで乗つた、駕籠には紙の枝をかざゝ
ぬばかり。猿若町へハツチヨで飛ばす時と、さして
かはりはない。最も鼻肩で抱へられて居た、江戸詰
の藩主が内命で、其本國へ落したので、手當はある
なり、派手な消光はして居たなり、控へ目ではある
が、さして不自由もせず、江戸を卯月の八日といふ
のに。

泊り／＼も本陣で、袴穿いた男の給仕で夕餉をし
たゝめる。紫は、海道の波の音が淋しいから、母親
の内懐へ前髪をつけて抱かれて寝る。

さて暁の鶏の聲、驛路の馬の鈴の音。おたちと云
ふと、駕籠が二挺、乗馬三頭、小荷駄が一頭。

蒼空の鶴に袂を翳し、夕日の波の眩いので茜を染
めた顔は、銀の扇でかくしもした。暮ると、次の本
陣へ乗つた駕籠を横づけで、兄の手に縋つて出る。
湯に入つて、化粧を直す。十日あまり八十里の道中、
鬢の毛も亂さなかつた。日和が續いて、親不知も、
唯蒼い空から、黒い巖にさゞ波の白いのが、果なく

さら／＼と寄するを見たばかり。珍しい貝殻を駕籠
舁に拾つて貰つて、大事にはこせこの間に納れて秘
藏したまゝ、駕籠から下りると、ハヤ指した地方の
藩主の下邸の一室に着いたので。――丁ど今、
山番の小屋へ来て、爰に立つた、十一年前のこと
ある。

地方のは手が違ひ、恰好が悪いとて、第一、母親が合點せず、人橋かけて捜しあてた、鳶の者の女房で、江戸から遁げて來たのがあつて、内職にはしませぬ、頼まるれば遊びがてらといふに頼むでは、紫の髪を結はしたといふ。嫂は子持だから餘り外出はせず、父親は出嫌ひ、兄はまた勤がある。母親と紫と、二三年さきへ來て、土地馴れる其鳶の女房を連れて、觀音様だ、愛染様だ、大橋だ、池だ、といつて一寸出あるいた。

皆が錦繪より他に見た事のない、振袖、高島田、襲着の裾の軽い、木履穿で、紫の矢がすりに、繻珍の丸帯、狸々緋の羅紗に亂菊の縫のある箱せこを懷つた、襟足が雪のやう、耳朶のすき透る、役者が舞臺から下りて來たやうな後姿を、生のもので、しかも往來で眼の前に。ともすれば、袖でも觸さうな處をぞろ／＼ついて歩いて人だから、驚いて、呆れて、眼を覺して、茫乎で、うつくしい、品の可い、さつぱりした、艶な、女の都風俗をはじめて見たのは其

時ときで。

杜若かきつばたの濃こい紫むらさきなるを、雨あめの日ひ蛇じゃ目め傘の下したに、地ぢずりに提さげて歩あ行くよりも、むしる此この矢やがすりの姿すがたは、片田舎かたあなの眼めに立たつて仰ぎやう々／＼しく評判ひやうばんした。

何なにとやらいふ樓ろうの高尾たかをといふのが素人しろうとになつたのであらうか。梅曆つめしよみの中なかなるが、洒落本しやれほんの中なかから駈落かけおちをして來たのであらうか。對手あひては誰たれだ、それにしては、初心うぶだ、威ゐがある、おとなしい、じろ／＼見ると顔かほを赧あかうする、素人しろうとだ。皆みながついてあるくから、おもはゆげといふ状かたちを見よ、うつむいてつゝましげに急足いそあしでいつも歩行くわ。其癖そのくせ澄せまさぬ人懷ひとなつかしい、近ちかからむものはおたふくども、一目めなりと拝をがんで置おけ、一生しやうの思出おもひだだ、髪かみの毛け一筋すぢでも肖にて見みるよ、と女房持ににやぶりもちまで騒さわぎ立たて、寄よると觸さはると其その風説うはさ。何時いつの間まにか素性すじやうも分わかつて、江戸えどの下谷したやから此方こつちの下邸くもやしきまで、土つちといふものは踏ふまないで乗打のりうちにして、金春こんばる金之丞きんのじやうといふ鼓打つづみうちの秘藏ひそつこ娘むすめだ。但たゞ長ながい道中だうちゆうの草臥くたびれやすめに、親不知おやしらずで駕籠かこを下りて雪踏せつたで渚なみさを踏ふんだと思おもへ。夕日ゆふひがさすので扇あふぎを翳かざして、袂たもとをふり絞しぼつて肩かた

にかけた。衣服は紫のおなじ矢絰。横には空駕籠に
嫂が乗つてまた一挺、うしろに馬が三匹で一ならび
にづらりと留まつた。佐渡から打通し青疊千疊敷へ、
白紙が散つたやうな波頭で、サラ／＼といふ風ぎた
日に、夫婦貝だ、櫻貝だ、銀杏貝だ、子安貝だ、と
雲助に拾はして、興にのり、遊山ではないものをと、
皆が促しても肯入れないで、海が黒くなつて巖が白
くなり、夕日が沈んで紫の衣服の色も青ずむまで、
浪打際をあるいたとよ。海も名残を惜んだのだと、
細いことまで探つて来て、誰いふとなく都落の、紫、
紫といひ囃したものである。

で半年あまり経つ間に、身の上が悉しく分る頃は、
本尊の姿がかくれてしまつて、あまり市人の目に觸
れなくなつた。

が一年経つてあくる年の春、川一條市を隔てた山
下の一構、流に臨んだ森の中の一軒家で、二階造の
欄干のついた、蓑岡といつて土地随一の財産家の寮
の裏、丁ど山の麓になる、薄ら寒い細道に、表門と
は大違ひで、一枝折つてつけたばかりの門松の淋し

い木^き戸^どで、
また此^{この}矢^やがすりの姿^{すがた}を見^みたが。

こゝあたりには珍らしい、三四人の女中を對手に
 追羽子を打つて居た。白い手のしなやかなのが撓みさ
 う。其頃歌舞伎の大立物、二代目澤村訥升が白頭一
 人立、二尺ものゝ羽子板を輕と取り、高く飛んで、
 やゝ風立つた、たそがれの空にきりゝと舞うて落ち
 かゝるのを、カチノゝと受留めて、羽子の音冴々し
 く、松をめぐつて葉がくれに、人目もくれないで、
 静々としてまはる、裾袂に友染のこぼれた姿は、
 また八方へ吹聴をされた。

いよゝゝおもひものか、内君か、蓑岡の持物にな
 ったと、人の了簡が極つてから、程たつて、藤色の
 小袖を着せた嬰兒を乳母が抱いて眞先に立ち、下婢
 が日傘で小廁がつき、紫は鐵漿を含んだ詰袖の紋着、
 白襟で、丸髻に鼈甲の笄であとについた、一行の晴々
 しい宮詣が寮の表門から出たことがある。

五月には、吹流が天を蔽つて幟が立つた。

で最初が矢がすりの娘姿で、次が追羽子、それからあとが宮詣の紋附といふ順序で、紫の時代は過ぎて、騒ぎ立てた人の口も静になり、さしあたり皆が黙つた。いまに九年と十年と経つた後、懸で三美人の投票でもすることがあると、若いものゝ数が此地で投票する最高點、第一蓑岡の寮の丸鬚といふことになるのであらうが、まづ其までは無事であらうと思つたが然うではない。

はじめて幟が立つた年から數へて三年、紫の兒は三歳になつたといふ年紀から、不思議に品行が可いと風説した蓑岡の當代、三次郎といつたのが、せきとめた樋口を雄灌ではづしたやうな崩れ方で、相場へ手を出す、飲續ける、女狂をする、路傍で寐そべる。といふ身持。

寮のお庭を拝見と云ふので、罷出で、築山だ、泉水だ、唐橋だ、と半日見巡つて、晩方まで居たものがある。打水をして、松葉一ツこぼれて居らぬ前栽の植込をすかして見ると、木隠れに斷續した長廊下を、夕餉の運で、左裯の婀娜もの、振袖の艶なも

の、一列にならんで、奥座敷へかよひをするのが八
九人、まだノ、三味の音も奥深く聞え、太鼓も鳴つ
て居たが、皆廓で屈指の女だ、アノ驕方は恐ろしい、
と舌を巻いた。

十二の藏も三萬畝の沃田も、本宅も此寮も、既に
其頃は故人であつたが先代は、高利貸から仕上げた
もので。

最初は濱でこぼれ魚を拾つて賣つたものだが、元
日の朝だといふ、初日を拝みに千石船の持主が船に
乗込むで帆柱を禮拜した。朝霧のなかに、先代の蓑
岡の九平といふのが、烏帽子を被り、白丁を着て、
あらかじめ帆柱の突尖に蹲んで居て、自分の口から、
善哉、汝、冥福を得むとならば、板小屋に露宿して
こぼれ魚を拾つて居る、九平に五兩小判を與へよ、
渠は神慮に合ひしものぞと、いひ終ると、てつぺん
からもんどり打つて、海中に白波を立て、没したが、
すぐぬき手を切つて泳いであがつて、首尾よく小判
を頂いた。其が元で高利を貸したが、あれノ、と
ばかりに成りあがつたと、突拍子もない風説をさへ

した位ぐわいなもの。

が、三代だいだいまでは持もちあへず、初代しよだいが歿ぼつして二代目だいめが、やつと部屋住へやすみから直なほつたばかりで、紫むらさきと、森もりの中になか、薨いらかの聳そびえた欄干らんかんづきの總そう二階かいで、清きよい大川おほかはの流ながれに臨のぞむだ、寮れうの内うちに住すんで、五年ねんとは持堪もちこたへず、家いへも藏くらもありのまゝで、藻抜もぬけになつた。主人しゆじんのからだは、こゝに、其頃そのころ寮番れうばんであつた親仁おやぢに守まもられて、空むなしく墓はかに眠ねむつて居ある。塔婆たふばの面めんの、ゝゝゝ、信士しんじと書かいたのが其それである。

あれまでの分限だつた蓑岡の身上が、五七年の間に微塵に成つた。其よりも寧ろ怪むべきは、若い主人の身持である。丁ど崩れ出した前あたりから、寮に紫の姿が見えなくなり、何處へか行方が知れなくなつたが、仔細は分らない。若い主人の放埒は何か其故ではあるまいかと、人々はいひ／＼する。去年なくなつた一週忌。紫が所を去つて七年目で、笈を負ひ、頭陀袋をかけた、變つた千個寺詣の扮装で、恰も命日、墓番の親仁が小屋に来て現在イむたのである。おもがはりはして寔れて居るが、其清い、情深い、優しい、しかも威の備はつた眼と、笠の裏で下から見上げて眼を合した親仁は、紫が門で追羽子をした時也知道つて居る、宮詣に出た時也知道つて居る、居間にならべた其お雛様の階下に跪いて、爺や、一杯おあがりと、白酒の酌をされて、餘りの勿體なさに、いける口ながら咽入つたこともある。爾時は、五壇に積んだ雛壇の燃立つやうな緋の毛氈を敷いた、白と紅と、桃の花瓶に亂れ咲いた中に洞燈の灯がともれて、蠟燭の影に玉のやうな雛がまた／＼く下で、

こゝに寐ねて、お雛様ひなさまとおはなしをするの、と言いつてたあどけない人ひとであつた。ある時ときは絹夜具きぬやくをかけた炬燵こたつに凭もたれて、前栽ぜんさいの梅うめの古木こぼくが三ツ五ツ蒼つばんだのを、二子窓れんじまどから眺ながめながら乳呑兒ちのみこを抱だいたまゝ、件の二尺じやくもの羽子板はこいたで、曲まがづきをやつて、一度どつきあげたのを片膝かたひざも立てないで半日落はんいちおとさず、女中ぢよちゆうどもを驚おどろかした名人めいじんで、或あるひは二百枚まいまいた歌留多かるたを讀よみながら取とつて、五人にんの車くるまがゝりを單身みひとつで突崩つきくづしたこともある。一時あるときは爺ぢいやが嘆願たんくわんに困こまつて、倭文庫やまとぶんこの講かうし釋やくをして聞きしたこともある。ありがたい方かただと思おもふと、爺ぢいやの鼻はなは源氏げんじにある、山科やましなが館やかたに紅くれなゐといったお腰元こしもとのおとつさんで、門番もんばんをして居ゐたのによく肖にて居ゐるといつた口くちの悪いお方かたなり。怨うらめしくもまた懐なつかしく思おもつて、高樓たかどのから、また枝折戸しをりどから、書院しよゐんの窓まどから、また湯殿ゆどのの口くちから、ぢいやと一聲ひとこゑかゝると齊ひとしくぶるゝ震ふるへるまで、いつでも太いたく身みにしみた、寮番れうばんであつたもの。何なにしに其その佛おもかけを忘わすれよう！

親仁おやぢは足あしを折をつて片手かたてをつき、這身はひみで笠かさの内うちを覗のぞいたまゝ、海鼠なまこに藁わらをさしたやうに、べとゝと小ちひさく、圓まるくなつて、額ひたひを千個寺がじの婦人をんなのつまさきに

つけて、草鞋をなめるやうに突伏して踞まつた。其
まゝ消えても失せさうである。

笠傾げてちつと見たが、千個寺の婦人は、額をつ
けられた足をのけようとせす、其まゝ胸を伏せて
片膝ついて、屈むで搔抱くやうに片手を其背にかけ
て、其時、かなぐつて笠を取つた。いまさらながら
見まもらるゝ、氣高い顔で斜めに覗いて、鷹揚に、
ものゝ優しい聲で、
「爺や息災でよかつたね。」と一言さういつたば
かりで、眼をねむつて涙をおさへた。

親仁は附着いたまゝ離れない、布子の背を二ツ三
ツ撫でゝ、
「もう可いよ。爺や、さあ、もう可いよ。」
「御免なされまし、御免なされまし。」とばかり
で突伏したきり泣いて居た。

戸口に立つて腕を拱き、無言で此體を見て居た同
伴の漢は、背高い身體を折屈めて、むづと親仁の襟
を攫むだ。

「とっさん、まあ、これ頭くちむちを上げあなせえ。」

「あなた様、あなた様ア御機嫌ようござります。
旦那はハヤ申譯がござりません。」と啜泣にいふこ
とは紛れるけれども、眞心はよく知れた。其人が留
守の間に、若い主人の失せたのは、自分が殺しても
したやうに親仁は悔をいふのであらう。

千個寺の婦人は、平伏した親仁の背に手をのせた
まゝ、其頸のあたりをしめやかに見て、何にもい
ないで頷いて居る。

「これさ、起きろよ。まあ、何てえこつた。そん
なに附着いてちやあ、お足が擦つてえやな。えゝ、
おい。」とこつ／＼と其帶の上を叩いて云つた。

「はい／＼。」

「まだ、放れねえや。しやうがねえ、山蛭のやう
だ。これ、串戯ぢやあねえ。人が見て笑ふぜえ。」
と男は持て餘したか引立てようとした、手を放して
苦笑したが。取纏られて素直になつて居る、氣高い
人のおもやつれた、束髪、艶かなのも櫛の齒を

入れないで、しツくりと黒く頸うなじに懸かつて居ゐる、頸脚えりあしも垢あかつかず、額ひたひも清きよらかに、手てさきも細ほそく白しろいのに、荷にに餘あまる笈おひを背せにして、色いろのあせた裕あはせの袖そでの、膝ひざに垂たれかゝつて重おもさうな、あはれにも殊勝けなげな姿すがたを見みて、ぎよろりとした目めに、これも暗涙あんるあを湛たへて居ゐた。

千個がじ寺じはまた、搔撫かいなでゝ、

「爺ぢいや、何どうぞしたか。」と問慰とひなぐさめるやうな言ことばでいつた。これに、漸やっとむず／＼と天窓あたまをあけて、

「何なんともござりませぬ。はい、爺ぢいは何なんともござりませぬ。餘あまりのおなつかしさに、えゝ、勿體もつたいない。」と親仁おやぢは身みを起おこしたが、屈かむだなりで手てを合あはせる。

婦人をんなは笠かさを片手かたてに、袂たもとを拂はらつてすつと立たつた。

がホツといきをついて、傍かたはらにあつた手桶てをけに目めをつけて、

「清水しみづかい。」といつて親仁おやぢを顧かへりみる。

「えゝ、題目堂だいもくだうのでござります。」

「あゝ、日朝にっつうさま様の、然さう。」

ぢつと見みて、唇くちびるをキツと結むすび、片手かたてを胸むねにあげて、

婦人は伏拝むが如く、たてに掌を開いた。

「爺や、一杯飲みたいがねえ。」

「召あがりますか。ぢいさん、おい、嬢様があがるとよ。」

「えゝ／＼。」

「えゝぢやあない、かう、何ぞ持つて来ねえ。」

「柄杓は、」といひかけて、親仁は腰をのして急いで立つ。

「杓呑が出来るか。茶碗。」と言つて、漢は、親仁が土間へ飛込んで、藝者どものならんだ前をきよるついで廻るのを見てまた苦笑。

「ぢいさん、此かい。」と先刻から一寸、少いと二人で耳打して居た老妓は、傍を向いて、手近にあつたのを見附けて取つた。

「おゝ／＼、其だ、其だが、待つてくだつしやい。

えゝ、此處へあがつて、まあ、ゆつくりとまゐりませ。」と何かそは／＼して、件の筵を敷いた上を、跣足で框から伸上りながら、手拭で拂いて居る。

漢をこは千個寺がじを見返みかへつて、

「お休やすみなさりますか。」

婦人をんなはちつとも猶豫ためらはないで、

「此このまゝでお墓はかへ参まゐります。寄よるのは後あとにしよう

ね。
」

「それぢやあ親仁とつあん、おい、茶碗ちやわんを。」と聲こゑを

掛かける。

「ま、ま、こゝへござらつせえ。」

「疾とく、」と云いつて、男をとこはつか／＼と跨またいで入はひら

うとする。ト老妓らうきは、ツト其框そのかまちから離はなれて出でた。

「もし、それへ上げませう。」

「あ、私も飲まうや。」

「いま思ひ出したのでもあるまいが、先刻から變つたことに見惚れて居た少い妓は、此時立つて出ようとした。」

「お待ちよ。」

「だつて、」

「いゝえさ、まだ貴女がめしあがらないぢやあな
いか。養岡の御新姐様だよ。よく見てお置き。アノ
紫様といつた方だ、叱！」 嘸き留めると、頷いて
膝に手を置いた。

底に少しばかり汲取つて、白い縁の茶碗を含んだ。
紫は、紅にぬれ色を見せて、脣を濡ほしたが、うつ
とりとしたやうである。ほつと息をついて、

「ぢいや。」

「えゝ、」と、むかうで振向いて、手を膝に垂れてお辭儀をした。

「七年前にお國を出た時分、寮の井戸が濁つたか

ら、あゝ、もう此地の水は飲まれぬか、せめて餘所の水はのむまいと思つて、川だの、池だの見る毎に、何なにほしい時も堪へて居た。峠を越す時だの、濱邊をあるく時だの、あゝ何うかして、御國の水を、もう一度のみたいと思つて居たから。」

漢は言を引取つて、

「何よ、さつきもの、此處へ行らつしやる道で、舊の寮だとかおつしやつた、山下の邸へお寄んなすつて、主ア門のわきにかくれて待つてお出でなさる、俺玄關へ行つて、頭をさげた。恐れ入りますが此方様のお邸のお庭の、唐橋の傍にござります、アノ井戸の水を一杯下さいましと、然ういつて頼むだら
の。」

「ぢいや、アノ水は最ういけないとね。」

「えゝ、もう何の故か。水晶のやうでござりましたが、お嬢様お留守になつた時分から、濁りました。旦那様がおかくれになります前から、ぶツノ、叱言をいふやうに泡が立ちます、溝のやうな臭がして一滴もいけませぬ。はい、其まゝで、いま居ります者

も貰水だと申しまする。」

「がっかりしてお出なすつたが、お口に合ひましたか、お嬢様。」

「あゝ、おいしい水なの。ぢいや、寮のとかはりはないね。」

「はい。」といったが、親仁は腰を屈めて立つて居たまゝ、すゝりなきして、古手拭を目にあてる。

紫も愁然と顔をそむけた。

漢はとみかうみて、腕を拱いて黙つて立つて居たが、フト思ひ出したやうに、

「およろしくば。」とばかりいつて、そつと紫の顔を見た。

瞳を返して、

「飲みますか。」とやさしくいはれて、何うしたのか、わな／＼とふるへた。

紫の手から、おづ／＼しながら茶碗を貰つて、目を眠つて頂いた、が、忘れたやうに一息にあふいで呑むだ、其顔の色も變つて居る。

「もう、一生の思出でござります。」と氣ぬけがしたやうになつて、ばつたりと、地に手をつけて、がつくり首垂れたが頭を擡げ、

「へい、これで、歸れならば歸りますが、こゝまでおともをして参りましたから、お邪魔でござりませねば、おまゐりになりますお墓まで、もう一足、おともがいたしたうございですが、」

あふいで云つた目に涙を湛へて居る。

紫は答へなかつた。

三人が情に迫つて、人目を忘れた此のありさまは、少い妓がのんどの渴いたのも忘れさしたであらう。皆が唾をのんで見て居たのである。此時、藝妓に附添の男の、土間にしゃがんで膝の上へ手を拱いて居たのが、獨で頷いてツト前へ出た。

「えゝ御免なすつて、此處へ出まして恚う申しましては、可いのか悪いのか存じませんが、御免なすつて下さい。此處に参りましたのは、皆廓の者で、旦那には大層御鼻屑を蒙りました。今日ア御命日と云ふので、まあ皆がまた多勢、お参詣をしたいなん

て、へい、そんなこと申しますけれど、どれも親方
持、また勤の事でありますので、まあ、一人が五六
人づゝのことづけを持つて來たんでございますが、
あなた様、御參詣の御様子、こりや私等が出ます處
ぢやあございませぬ。最も名高いので、一人も其何
か、妙な、かゝりあひのものは無いのでございま
すけれど、故ツと御遠慮を申上げませうと存じます
で、同伴もいらつしやりますから、次手にハア眞に
何ですが、かうやつて持つて參りました塔婆アおこ
とづかり下さいまして、お氣に入りましたら、あな
た様お口から、こんな奴等ア參りましたと、おこと
づけが願ひたう存じます。いえ、そりや最う然うお
つしやるのは知れてますが、故ツと御遠慮をいたし
ますことで、ねえ姉さん何うだね。」
と、くるりとうしろ向いて老妓を見ると、これも
幾度も頷いた。

「まあ、何分。へい。」と一ツ天窗をさげて、
「何處か、ま、ぶらついて歸るとしませう。」
皆が顔をあはせて合點をしあひ、帯に煙管をしま
ふ、袖を引張る、裾を拂く、鬢をなでるなど、ざつ

とあり。ぞろ／＼と、綺麗ないろ／＼の衣きものは、小屋こやから、ばらりと出でた。

紫むらなきの前まへで小腰こししを屈かめて、皆みなが行ゆきかけると、身みを開ひらきながら片寄かたよせつて、

「失禮しつれいを、」と言いひながら見送みおくり果はてた。

紫むらなきは振返ふりかへつて、

「お前まへさんも歸かへつておくれ。」

「でもござりませうが。」と立たち兼かた、――

これには何なんぞ仔細しさいがあらう。

「何うした、お新發意。」

しつかりした聲、濱の摩耶寺の鐘樓の前で、背後から天窓を撫でたのは、此邊の漁師と見える。毛脛に俎のやうな杉の杵、棕櫚の繩鼻緒のたつた、厚い齒の下駄を穿いた漢である。うつかり空を見て、何か幼いものながら、習はずに經を讀む、此の境遇にある男の兒の、跣足で胡座かいて砂いぢりをするのでなく、剃立の可愛い天窓圓とうつくしく、襟の白い、耳朶の大きいのが、無垢の布の、洗ひざらしではあるが汚の見えぬのを着て、黒い覆輪のくけたのを背からまはして前で占めた、あかぎれのない、象牙のやうな小な踵に、穿きあまる縁下駄を引かけたが、恰で臺つきの雛の立つた形。手を額に加へて、寺の棟に横を向いて、むく面で羽虱をつゝいてる、大な鳶を見ながら澄ましてゐんだうしろ姿、年紀には似ないで、宛として、唐畫の山水の中の人物である。

背後から不意に天窓を撫でたので、新發意は驚いて振り向いたが、仰いで漁師を見た、らふたけた十ば

かりの、あどけない顔に日があたつて、白いのにかりがさし、一ツの目が腫ぼつたく、瞼が赤くなつてやゝたゞれて居たが、日光をうけてニゆさうである。

むくつけない顔に、愛想らしい、漁師はカラ／＼と笑つた。

「はゝゝゝ、お新發意、和尚は寺かね。」

「また參詣に見えたの、」と新發意は大人びたものゝ言ひやう。恚ういはれて、漁師は何か行詰つたが、チヨイと頷いて、

「むゝ、そんなものよ、何は、和尚様はお寺かの。」

とあらためて言ふ顔を、まばゆさうな目でのぞいて、ふつくりした片頬に笑み、

「あの、あんまりお前、無理を言つてねだるから、それあの困るんだツて、お上人様は、昨夜から出てまだお歸りぢやあないよ。」

「何か云はあ。」とまた笑つて天窓を撫でる。ト痒いか袖口で目をこすつて、

「何も岡藏が、アノ雲助をして居た時、紫色の衣服を着て錦繪のやうなお嬢様に、櫻貝を拾つてあげたからツて、お上人さん御存じの事ぢや無いのだから。アノそれから女房も貰らはないで居るからたつて、それも何もお上人さん知らないこつた。そんなことは、あのお經には書いて無いから、どんなにねだられたつて分りやしないよ。それなのに、むづかしい、苦い顔して、お前來るとは、お上人さんをせめるから、それだから、あの、今日は居ないんだよ。ほんとうに、うるさいツて言つておいでだつた。」
と云ひながら、莞爾する。岡藏と云ふのは、堪らないやうな面相で苦笑をして、

「あんなこと言はあ、何時聞いたよ、お新發意。え、誰に習つてそんなこと覺えたよ。むゝ、何、おらあ何にもそんなことは知らねえぞ。いやほんとうに、和尚め、留守か。」
「あい、」と頷いてまた目をこすつた。新發意は忘れたやうに、こんどは眞面目である。

「ぢやあお新發意、お前さん、昨夜また一人だな、むゝ、知らせば可いに。おらあ、また泊に來て、足

藝げいぶつて、踵かかとの上うへでお前まへを躍をどらせて遣やるだつけなあ、
淋さびしかつたらう。狸たぬき和尚しやうめ、いい年と紀しをからげて、
拂ほつ子すのやうなしろ白しろいやつをは生はしてながら、畜ちく生しやう、何ど
處こへい芋もをほ掘ほりにゆ行ゆきあがつたか。「とに苦がいか顔ほをして、
緊しまつた一も文ん字じのお大ほ口くちをゆる弛ゆるめてまたか微すかにわら笑わつた。

十四

岡藏をかざうはフト思おもひついたやうに四邊あたりを見たが、鳶とびはまだ屋やの棟むねに居ゐて、日向ひなたで此折このせりから羽はづくろひをしたが、けろりとして嘴くちばしを腹毛はらげにさして凝ごっとした。

「のんきな状さまだ。」と投げたやうに云いつて、岡藏をかざうはまた俯向うつむいて、新發意しんほちが目めをこすつて居ゐる顔かほを覗のぞき、

「そりや、然さうとな、お新發意しんほち、誰たれかお寺てらにお客きやくがあらうな。」

「どんな。」と袖口そでぐちを引張ひっぱり直なほしてあをむいた。

「何どんなつて何なによ、六十六部ぶよ。え、ぢやあない、巡禮じゆんれいか、そら、何なによ。アノ何なんとか言いはあ、御題目おだいもくを書かいた御札おふだをしようつて、笈おひしるかついでる、何なに、千個寺がじか、むゝ、それだ。」と頷うなづくと、新發意しんほちも意こころを得えて黙だまつて合點がってんする。

「何なによ、女をんなばかりのよ。」

また頷うなづく。

「えゝ、二人連ふたりづれだ、婆ばあさんと少わかい二十八にじゅうはち九くな、むゝ、然さうだ。」と一言毎ひとことごとに、岡藏をかざうは身みに力ちからを入れ

て、

「来たか、お寺へ、え、居る。然うか、何處に居るの。」

と何かそは／＼して、其俎を穿いた毛膺もがた／＼しさうに、むくつけない顔の目も眉も働いて、寺をずつと見込んで、爪立つばかりにあたりを見た。片折戸から遙に卵塔場をすかしたところを、

「何だい、」と新發意に然う言はれて、激した赤い顔で、背いて屋の棟に眼をそらした。

「何うだい、鳶ア野面だなあ、お新發意。」
とつかぬ事を言つて、また顔を見合はせた。

「は／＼／＼は／＼。」

「お客様が何うしたの。」

「何よ、え／＼、何でもねえがの。さつき磯でもつて其二人づれに、俺あ此處の此のお寺の名を聞かれたわけよ。二人とも笠をかぶつて居たがな。かう、まあずつと砂道を眞直に一町ばかり行つた處だつて教へたがな、何か、土地は初めての様だ。殊にハヤ日にあぶられちやあ居ねえ。弱々しい、心許ねえ。あつち此方、笠の中から、え、何よ、其少いのがす

かして見ながら行つたわけよ。一條道なり、近所に
家あねえ、一棟だ。あの松の中の寺だつて、砂原見
通しの此森へ見當まで着けて教へたから、見はぐし
て迷やしまいと思つたけれど、何處か心許ねえ。何
の一足だ。ついで行つて案内して、次手に和尚に一
番驕らしてやれ、女同志だ、母娘のやうだと然う思
つてな、あとからついて来ようとする、えゝ、お
新發意、居合はせた奴どもが、むねきぢやあねえか。
見や、見や、岡ア千個寺の女のあとにくつつかあ、
道中の何かを狙ひやあがつて、汝ア山鳩だあ。谷の
俺のお比丘尼をおツぱらましたのもお前だらうツて、
汚らはしいことを言ふからの、俺もむくれ切つて見
合はせたが、何だか懐いやうで堪らねえから、我慢
が出来ねえで、實あ皆の目をかくれて来たのよ。何
か、顔を見られるやうで、子供のお前にも極が悪
いと云つたやうな次第のものよ。つまらないわけだ、
なあ、お新發意。」と来た方を振り向いて、岡藏は心
咎めがするらしかつた。

新發意はいたいけで、

「あの、然う、二人とも先刻来たの。摩耶夫人様

にお参まゐりをして、本堂ほんだうに坐すわつておいでだったから、お上人しやうじんさん、留守るすだったけれど、休やすんでござるが可いい
ツて、お位牌堂ゐはいだうのわきの小座敷こざしきへ通とほしたんだ。」
「え、不思議ふしぎだ。本堂ほんだうに坐すわつて、小座敷こざしきに通とほつた。
む、お新發意しんぼちよくしてあげた。」

「然して何か、お小僧様とか、お新發意とか、はい、とか、難有うとか、ものを言ふか。え、ものを。何、え、誰だつて。然うよ。唾で無くツてしやべらないと云ふ奴もねえけれど、其處が何だ、チト其、ものだからよ。それ、千個寺の女はまた云ふことが此人方等と違ふだらうかと思つてよ。え、何、坐つてたつて。矢張あたりまへの、袖をトやつて、足をトやつて、坐つたか。え、む、然うかな。あんな人でも矢張然うかな、坐つたり、立つたりするだらうか。でも、何處か違やしねえか。あたりまへか、何んな聲だつた。む、なるほど眞似られめえ。はてな、それだが、何だ、え、おらあ、こりや、何うかして居らあ。」

しきりにあせつたが、岡藏はホツと息をついて空を見た、

「見ねえ、お新發意、状あ、野面だせえ。」鳶はけろりとして居たのである。新發意は黙つてしまつて、聞くといふよりは、むしろものを言ふ岡藏を見て居たのであつた。

「むゝ、そして何か、番茶ばんぢやでものましてくれ
か。」

「あゝ、土瓶どびんで出した。それから、いり豆まめがあつ
たから其それを持つて行つたの。」

岡藏をかざうはほた／＼して、

「旨うめえな、其そのいり豆まめにやあ花はなが咲さくぜ。お新發しんぱ
意ちあ利口りこうだい。むゝ／＼、よくしてあげてくれた。」
と然さも嬉うれしさうである。あまりの様子やうすツたらないか
ら、新發意しんぱちも怪あやしくなつたか、

「あの、知しつた人ひと。」

「何なに、何なに、別べつに何も知しつた人ひとと云いふのぢやあない
が、その、何なによ。」とこんな幼いとけないものゝ前まへながら、

岡藏をかざうは口籠くちごもる。トぢつと其顔そのかほを見みて居ゐて、

「あゝ、錦繪にしきゑのお嬢様おぢやうさまか。」と禪心ぜんしんあつて、圓まるい
もの、五本ほんの指ゆび、個中物有こちうものありこれ什麼いかにで、突拍子とつびやしもな
いことを一喝いつかつしたやうに、附つかぬことを打ぶつけにい
つた。

岡藏をかざう吃驚びっくりした。

「串戯を言はあ、勿體ねえ。」

「それだつて、うつくしい人だから。あの、モ一人、お婆さんの方は、何かいろんなことを話すけれど、きれいな人アそんなに云やしない。私、傍へ行きたいけれど、遠慮してるの。本堂の佛様、やさしい顔して、拝むと、少し莞爾しておいでだけれど、何だが勿體ないもの、傍へ寄ると、でも、叱りさうぢやあないけれど、恐いやうだ。尊いのだつて、お上人さん然う云つた。」

とおぼるげなことをいふ。岡藏は聞いて案じて居て、

「むゝ、そりや人品よ、威があると云ふものだ。」

えゝと、小座敷に二人か。」

「あゝ、然してぴつしやり閉切つてあるの。先刻もそつと行つて見たら、分らないんだけれど、泣いてたやうだ。だから、何うしようと思つて、お上人様アお留守だし、こゝにアノ、それでこゝに居るんだよ。」

とたよりなげな風情である。此兒も人なつこい、愛くるしいので。

「待ちねえよ、泣いて居たつて。はてな、待ちねえ、小座敷に居ると云やあ、何だ、ソツと行つたら、前裁から様子が知れよう。何うかしてモ一度見たいもんだが、え、お新發意、お前さんも何なら一緒に連れて行きねえ、そつと見よう。」

「だつて悪いから。」

「可いやな、こんな野郎ぢやあ悪からう。氣味を悪くされると悪いで、おらあ、遠くに居て内證で見らあ。お前さん小兒だから女の兒は構はねえ。えい、おい、然うしねえ。だから叱られたらあやまることよ。可か、さあ、さきへ行きねえ。ついてかあ。」

あゝ、小兒を出に……小恥かしくもな
く……畜生。」

「何うしたの。」

「野面なもんだぜ。」と岡藏は、窘んで鳶を見た。

小さな身體に縁下駄を引摺つて、青く伸びた芝の上を、新發意は黒い帯で無垢の姿で、ソツと小座敷の庭にうかゞひ寄る。

岡藏はずつと離れて、木戸の中へ片足を跨ぎ、半身を庭の隅へ入れながら、片足は境内に浮かして居、横になつた顔を出して、構はぬ、開けい、小兒だから大事な、氣に逆つたらあやまるこつた。と兩手を出して、・・・見返つちや猶豫ふ新發意の身體を遠くから掬つて押すやうな、仕方、手眞似をして居る。

微笑みながら頷いては、少しづつ前へ出て、いま小座敷の前と思ふと、障子の裏に人の氣勢。また猶豫つて、岡藏を振り返る。ト焦つて押すやうに手を上げ下げして煩かしがる。頷いて、またコツソリと寄つたが、極が悪かつたか、庭前を直角に切つて筋違にづつと外れた。新發意は小さな築山の下、根笹隠れに二坪ばかりの池があつて杜若が咲いて居た、

其^{その}ふちに立^たつて、手^てのものを落^{おと}したやうな、呆^{あき}れた岡^{をかざう}藏^{かほ}の顔^{はるか}を遙^{みかへ}に見返^{みかへ}つて、所^{しよざい}在^{ざい}なく莞^{にっこり}爾^りした。

「不^{いけね}可^ねえ／＼。」と口^{くち}の内^{うち}で呖^{つぶや}いて、岡^{をかざう}藏^{かほ}は伸^{のび}上^{あが}りざまに手^てを振^ふつた。

新^{しん}發^{ほち}意^いはあどけなく、いや／＼をして、また莞^{にっこり}爾^りしたが、其^{その}まゝ池^{いけ}のふちに屈^かんだ。圓^{まる}い臀^{いしき}は縁^{えん}下^げ駄^たの上^{うへ}へちやんと据^すゑられた。

むかうで岡^{をかざう}藏^{かほ}にます／＼焦^あせられて、薪^{しん}發^{ほち}意^いは俯^{うつ}向^むいたが、遣^{やる}瀬^せなさうに指^{ゆび}のさきで長^{なが}く伸^のびた杜^{かきつ}若^{ばた}の葉^はのさきを撮^つむだ。ト葉^は摺^すれがして、一^{ひと}葉^はサラ／＼と動^{うご}いて、新^{しん}發^{ほち}意^いの踞^{つくば}つてぢつとして居^ゐる姿^{すがた}が、チラリと揺^ゆれるやうに見^みえた。途^と端^{たん}に、「あれ！」と叫^{さけ}むだ、障^{しやう}子^じの裏^{うち}で魂^{たまげ}消^ける聲^{こゑ}。吃^{びつくり}驚^きして、新^{しん}發^{ほち}意^いの姿^{すがた}は白^{しろ}い兔^{うさぎ}が飛^とぶやうに築^{つき}山^{やま}のうしろへ流^{なが}れて隠^{かく}れる。岡^{をかざう}藏^{かほ}もハツとして小^こ蔭^{かげ}へ踞^{しゃが}む。

障子の透間に手が懸つて、急いだ如く其半ばを開らく、ト板縁に載せてある小笠の紐を結へて附けた笈の上へ、色のあせた衣ながら、衣紋の正しい、威のある美しい顔、束髪をつややかに耳にかけた、手甲のまゝ、親指のさきを少しく開けかけた障子にかけて立つたのは、――昨日の其時、摩耶寺に居た紫である。

蒼海原は銀のやう、砂の濱にさら／＼と日かげがさして、池の中は晝の最中で、水に根笹の蔭が暗く、濃紫の杜若の花が沈んで、葉さき幽に戦いで居る、その一面の庭をぞつと見た。眉は憂はしげに、清い目がうる／＼して居た。

「何ぢや。」と取續いて、背後から慌しげに立つて来て、笈の傍へこれは片膝ついて、も一枚障子を右へ開けて、齊しく庭前を見廻したのは、母親と見えた、七十あまりの老女である。

消えも入りさうな現下の叫び聲、あなやと見る間に立つて出で、其庭を見廻しても、海原の方を見遣つても、濱松の中を透かしても、右を見ても、左を見ても、目につく蟲一匹這つて居らぬ。あまりの仰々しさに顛動した胸の轟くのが耳について、肉が動くやうな。女はト見れば、ぢつと目を三つて居るが、陸にも海にも何事も無い。うつかりした様子であった。どきまぎしながら笈の竹を一ツ拍つて、

「これ。」

「はい。」とはツきり答へた。

「何うぞしたかの、けたゝましい。何ぢやつた

ぞ。」
「吻と息を吐いて、おなじく手甲したので胸を撫でる。」

立つた紫もといきをついて、

「母様、御免なさいまし。」

「えゝ、何にあやまることも何もないがの。ま、ま、無事でよかつた。お前つひぞない、何うしたのぢや。癩のせめでか、恐しいものでも見えませんでしたか。」

「いゝえ、堪忍なさいまし。つい何でございます、

寺のお小僧さんでせう、彼處の杜若を引きましたのが、障子の間から見えたもんですから、私はもう吃驚いたしました。」

「お小僧様が杜若を撮んだツて、其が何の吃驚ぢや。をかしいではないか。案じられる、聞かせておくれ。」

「可うございます、母様。」と云つた時は、顔の色も常であつた。

「何も秘すことはないに、はなしてお聞かせ、氣に懸ります。」疑の色は解けぬ。

「秘しますのではないの、母様。お氣に懸りますならば申しませう。あの、山下の寮に残して参りました坊やが三歳になりました。あゝ、丁ど今時分。」と言ひかけて、つく／＼と空を視めて、

「唐橋の下に池がありましたのに、杜若が咲いて居て、ちよこ／＼あるきましたもんですから、乳母のさきへ立つて駈け出します。アレと云つて飛びつきましたが、水の中へ落ちましたの。私は、秋と千代と三人で、恚うやつて、縁側に立つて見て居りま

したが、吃驚びっくりいたして氣きが遠とほくなつたのですよ。坊ばうやは蟲むしも起おこらないで何なんともございませつかつた。私わたしはそれから一月つきはかり寐ねましたの。をかしうござい
ますこと、其それからはもう、小ちひさなのが水みづのふちにを
りますと、何時いつでもはら／＼思おもひますのに、杜かきつばた若わも
咲さいて居ゐますし、池いけも池いけで、丁ちやうど其その時ときのやうな氣きが
しましたから、落おちはせぬか、危あぶない、と其そこで聲こゑを立た
てたんですよ。ちかごろこんなに吃驚びっくりしたことはあ
りません。噓うそ、お驚おどろきなすつたでせう。私わたしさへあん
まり！」と云いつて紫むらさは笑わらつて居ゐた。

ちやうど此折、新發意は築山の蔭から根笹越に、最
 そのあい其愛くるしい顔を少し傾けて出した。眩い眼で、こ
 れは驚かされた聲の成行を伺つたのであつた。
 が心づかひをして居た千個寺は、少いのは立ち、
 老いたるは膝をついて、二人ともあからさまに縁側
 に笈がくれに見えたので、悪いことも見付くかつ
 たやうに、あわてゝ、かくれようとすする。

トいま紫の話すのを頷き／＼、目をしばたゝいて、
 堪へ得ない風情だつた老女が、目疾くこれを認めて、
 「あの、もし、お小僧様。」と聲を懸ける。
 呼ばれてかくれあへず、新發意は間の悪さうにま
 た顔を出して覗いた。

「おいで、おいで、こゝへおいでなさい。」と老
 女は手招きする。少し進んだが、傍に凜として立つ
 て居る、先刻、懐いが遠慮がある、叱られさうには
 ないけれども恐いと云つた、紫に憚りあつて、新發
 意は、さうなく、近づき兼ねるのである。

「人見をするかの。」と老女は紫を顧みた。

「遠慮をするのですよ。」と云つた紫は、其威のある目を和らげながら、口許をやさしく、頷くやうに傾いてぢつと新發意を遙に見た。

然うすると齊しく、大な縁下駄をやりちがへ、蹈みかへ、芝もしどろにばた／＼と駈けて來て、縁前で留まると、

「あい、」と云つて嬉しさうな目色をする。

「いろ／＼御面倒で難有う存じます。あなた、幾歳になりますえ。」と老女が聞く。

「十一。」

「あゝ、お十一かい。何時此お寺へおいでなされたの。」

「去年、お父さんが亡つてから、」

「おゝ、まあ、其はお可哀相に、そして母様は

え。

「存じません。」

「御存じないのか。それはまあ、そして何は矢張り此處のお生れかい。」

「然うぢやないの、彼處からアノ海を渡つて、お上人様と船に乗つて來た。」と云つて、うつむいた。襟の白い、耳の大きな、つむりのすつばりと蒼いのを、紫は瞬もしないで瞻つて居る。

老女はすり寄つて、

「いろ／＼なことを聞きますが、お小僧様、あなた、母様は御存じないが、父様は知つておいでなされるかい。何といふお方だつた。え、お小僧様。」と顔を覗いてから問ひかけた。紫は思はず聲をかけて、傍から、

「母様、そんなことおよしなさいませよ。思ひ出してお泣きです、悪うございますよ。」とおさへて云ふ。

「あゝ、左様だつたか。左様だつた、左様だつた。」とこれは口をつぐんだ。新發意は不審げに、こすつて居た、たゞれた赤い目で振仰向いて、うつとりしたやうに紫の顔を瞻る。ト心付いたものであらう。

「お目が痛みますか。」とやさしく然う云つた、

紫は極めて機嫌のいゝ面色である。

「痛い、痛い。」

「痒いの。」とあうむかへしに云つて、紫はしとやかに出て、縁に屈むで、手早く一ツほどいた手甲をはづして、新發意の頤にかけた、手は暖であつたが、少しふるへた。顔を背けて母親を見返りながら、

「目もらひですよ。」

「それではお小僧様、禁厭をしてお貰ひなさい。目もらひと云ふものは、一寸仕方をして、人の末の女兒に結んで貰ふと治ります。丁ど可い、この女は私が一番末の女ぢや。お役に立てゝあげませう。つひぞ未ださせたことはないで知りますまいがの、むゝ、よく利く、現當に治ります。仕方は私が教へますよ。お小僧様、まあ、此處へお上りなされ。」

「あい。」といった、が猶豫つて、そと紫の顔を見た。目の所為もあるか、おもはゆげである。

「此方へ、」と云つて、紫も指で縁側を教へたが、なほしりごみをして居たので、莞爾笑つて手を入れた。脇の下へ兩手を挟むで、紫は、ツと白衣の童を抱きあげたが、似げなく活潑に、しかも迅速な仕方であつた。板縁へ抱下して、

「軽いな。」新發意は日向の板縁で、瞻られる顔をやるせなげに笈の裏へ押かくして、嬉しげな微笑の見える、ふつくりした横顔を見せながら、極惡げに横すわりをして居る。うしろむきに圓い髻の乗

つた踵、投出した足は練物でしたやうにきれいである。

其内老女は何か、拵へた。紙を切つて長くした五寸ばかりのものを紫の手に渡して、

「さあ、これを持つて此處に居るのだよ、可いかい。お小僧様は内へござつて、此障子の、ほゝゝゝ、幸といふでもないが、破れて居る、こゝから其惡い方の片目でのぞく。お前は其處に其袂をあてがつて居て、はじめは伸して置く彼方でお小僧様が、（なあとを結ぶ）と然ういふと、お前は其處から（目もらひ結ぶ。）といつて、一ツ環にする。可いかい。それからまた、彼方で（なあとを結ぶ。）お前が、（目もらひ結ぶ。）と斯う云ふわけぢや。其處で、も一ツ環をこしらへる。またいつてまたいふと、三度、可いかい。三度繰返し、わを三個拵へる。これが、おまじなひで直ぐに治るのだから、さあ／＼、お小僧様おはじめ。」と老女はまめやかに促しながら、居寄つて膝に手をついて、障子の破目に覗き合ふ、二人の状を視めて居た。

「さあ／＼、あなたからぢや、なあにを結ぶと

」

「なあにを。」とやう／＼云つたが、新發意は目を放して此方を覗いた。

「ちやんとおつしやい。」

「だつて、あの・・・おばあさん。」

「可いからおつしやいな。」と障子の内から聲が懸つた。

「なあにを結ぶ。」

「ほ／＼、め、も、ら、ひ、む、す、ぶ。」

「これ笑はず、眞面目ぢや。」と老女はたしなめるやうに云つて笑つた。

「何ですか、母様、極が悪うございます。」と紫は振りむいたが、母親と見合した雪の様な顔をや／＼赤らめい居る。

「今度はお小僧様、そちらで云ふのぢや。」と促がつても、黙つて居るので、

「どれ、何うしておいでぢやの」と呟きながら老女は立つた小座敷へ入つた。
直ちに聲がした。

「なアにを結ぶ。」

「目も、ら、ひ、」と受けて見たが、たゞならぬ音調で、結びかけた環を引き結ひあへず、ソと見ると、母親は内に入つて人目がなかつた時の、紫の顔は蒼かつた。あとを云ひ得ないで密かにむせむだのである。

「何うおしだい。」

「目もらひ結ぶ。」と、居直つてしつかり云つた。「何を結ぶ。」とあどけない何にも、知らぬ聲の中に、ものゝあはれは籠つて居る。

目もらひ結ぶ、

何を結ぶ、

目もらひ結ぶ。

いひ直して全きを、絶句しないで三度續けた。紫の手の絲も三個の環を結び果てた。が、他に見るものがなければこそ、わがねた絲を袂に入れつゝ紫は顔見らるゝ心地がした。で、何となく振返る途端に、ものゝやうを聞取つて、恐るゝ顔を出して、木戸の蔭でうかゞつて居た岡藏の顔をチラリと見た。其まゝ顔を背けたが、をさないことを見られたと思つて、紫は顔を背ける時故と莞爾した。

岡藏は何と思つたか、放心の體で、つか／＼と進んだが、あからさまに其姿が見えた處で、ばツたり膝を折つて芝生に手を支いた。

けれどもこれは紫に見えなかつた。いま微笑んで目をそらしたまゝ、紫は身を起して小座敷へ入る。とうしる手ですつと障子をしめた。たをやめは障子

のなかへ人目から消えたのである。

座につくと老女は笑つて、

「御苦労ぢやつた。お小僧様、さあもうちゃんとなほりませす。」

新發意は行儀よく坐つて、紫の前でいたいけに手を支へ、

「ありがたう存じました。」とおとなしく然ういつて、機嫌のいゝ顔をぢつと見たが、バツチリと一ツまたゝいた時、・・・カタリといふ音。耳を傾けて其まゝ立つて、くるりと背後向いてちよこなんと立つたと思ふと、すた／＼と駆け出して、引戻されたやうに板敷の黒光がする本堂の前で、振り返つて見た、白衣の姿は、巨大な寶錢箱にかくれて、遙に跽音が聞えて止むだ。

障子の外に咳いた聲がする。

身を開いて齊しく膝に手を置くと、おづ／＼下方から摺りあげて、岡藏は自ら罵つた、其野面を出して一目見たが、天窓も上らない。で切なる聲で、

「大事ござりませせん、決して御慮外は申しませせん。」

私わつしはその、もうお覺おぼえはござりますまいが、十年ねんた経たちました。忘わすれずにお見み知り申まして居をります。親おやし不知しらで嬢ぢやう様のぢやうぢやうへい、お駕か籠こを昇かきました雲くも助すけでござります。かやうな處ところへしやつ面つらを出だしまして、ハヤお氣き味みが悪わるうござりませう。え、お氣きに障さりましたら、え、もう海うみの彼あつち方ちへでも參まります。地ぢ體たい透す見みをいたしましても濟すみませぬが、へい、御ご機き嫌げんが悪わるければ出でますのぢやあござりませなんだ。唯ただ今いま莞わん爾に遊あそばしたのを拜をがみまして、何なにが扨さて夢むちう中ちゆうでのたり出でました。え、此こ方ち人とづれにものおつしやるのはござりますまいが、恚かうやつていらつしやれば、船せん頭ど馬ま方かただ。たゞの千せん個が寺じ様さまのつもりで、何なにか御ご心しん配はいの樣やう子すをお話はなし下くださりまし。何どういふ御ご縁えんやら、いまだに生いのち命めいでもあげます氣きだ。「と、云いふこともしどろながら、眞ま情じゆうは面おもてに見みえて、紫むすひのいろ色いろもとけたので、遂つひに老らう女じよは語かたりだした。

金春金之丞は、抱へられた藩主が特に内意を下して、十分の手當で國許なる其下邸まで落したくらゐ
 鼻肩の大鼓打ではあつたけれど、維新の際なり、本
 領が危いので能處の騒ぎでない。最初の内こそ、折々
 心着があつて、留守役の者から附届もしてくれたが、
 國事多端の折から、段々構ひつけずなつて、金之丞
 は老夫婦空屋を借りて、格子戸の中に茶釜の小さな
 のを二個ならべて、紅梅焼を賣つて居たが、とても
 消光には足りなかつた。

九人あつた小兒の内、前後に亡くなつたのが三人
 で、江戸に残つたのが四人、國へ連立つたのが二人
 であるが、兄は其妻と乳呑兒とを連れて別に住居を
 して居た。これは狂言師で、おなじく不如意になり、
 消光に追はるゝやうに成ると、烈い男で、片田舎で
 米とは何だ、どつちを見ても畠ぢやあねえか。飯が
 欲しい、江戸ツ兒のやうでもない、空腹くばそこいら
 の畝の穀でも噛つて置けと、泣絶る女房を蹴飛ばし
 て出ちやあ、大酒を煽つて血を吐いて死んだので、

女房は連子で一神主に嫁いたから、これは便になる
のではない。

一番の姉女といふのは、容色も勝れて才もあつた。
酒飲で、これは一家が此國へ來る時分は、番町の小
ツ旗本で辻斬の上手だと云つて、いつも閉門をして
居た、なにがしと云ふのにかたづいて居たが、上野
の落ちたと風説が聞える頃から些少も音信が來な
つた。其次のは些少二の町で、顔に薄あばたのあつ
た女だが、極めて實體なので、豊前の小倉だといふ
大百姓とやらの許に縁づいて居る。それこれにめぐ
りあひもしようため、まだ一人他の養子になつて、
舅と折合が悪いため、家附の女と駈落をした弟があ
るから。其行方も尋ねよう、かた／＼見す／＼山國
の路頭に立たうよりも、舊より法華の信者で、祖師
に歸依をして居た固いのであるから、何彼と云ふよ
り、津々浦々の寺々に參詣しよう、小湊にも行つて
見ようし、身延へも詣らうと、老夫婦が破襖の暗い
行燈の下に一枚の袷を引張あつて、咳き入る寐物語
に相談をして、大鼓の朱い緒の綾を外すと、胴と面
と別々にしてたゞむで笈のなかへ入れた。いよ／＼

千個寺に出ることになつた。

これより前、紫は、名だたる蓑岡の山下の寮に、あまたの女中にかしづかれて氣まゝに遊んで居たのであるが、兩親が然うはならない前に、不自由はさせますまい、引取ませう、扶持をしよう、湯治においでなさいまし、隠居所をたてませうと、若い主人までが手をさげて云つたけれど、頑として肯入れない。お國猿が生意氣な、べらぼうめ、御身は知らいでも高利でこせえた家藏だ。かゝりうどになつて堪るかい、金春金之丞は女で食ぬと、白髪の總髪で、藝人の、柔和な、おとなしい口からありツたけの我まゝを云つて、其かはり紫は可愛がつてやつて下さい。諺にも申す末ツ子で、老人とも言ひなり放題に些と甘やかし過ぎました。羽子と、手鞠と、歌留多が上手で、これは名人と云つても可いが、能にはならず、小袖の片袖も縫ひ得ませぬ。不束なものながら、身にかへて可愛うござると、いつも然ういひ／＼した。

でいよ／＼老夫婦が笈をしよつて、夜にげ同様に

出で發はつすることになつて、あけがた町まちはづれへ着つくと、
腰元こしもとを連つれて紫むらさきが駕籠かこであとから追お着ひいたのである。

おともをしませう、良人から許をうけました。お
 二人が然うやつて廻國に行らつしやるものを、お年
 寄り、二子から見では居りませぬと、柳の茶屋と
 云ふので、みなりをかへて、藤の花も咲いて居た、
 しら／＼あけに丁どいまから七年前、紫二十の五月
 であつた。縁下駄を引かけて黄昏の梅を見に出るや
 うに、座敷から草鞋で下りて、其まゝ兩親の中に挟
 まれて松竝木に出たのであるが、唯良人のゆるしを
 受けたとばかり、何事も言はなかつたけれど、あと
 で知れると、蓑岡の主人とは正に七年だけと云ふ固
 い約束がしてあつたので、柳の茶屋で草鞋を穿いて
 出てから數へて、日數が二千二百十幾日、翌日がち
 やうど其日になるまで、めぐりめぐつて此處に來た。
 いま摩耶寺の此の小座敷に憩ひながら、岡藏に語つ
 て居るが、アノ小松原から透いて見える、白砂續で
 砥のやうな、むかうの海を船で越せば、一夜路で國
 に着き得らるゝ。

で約束は變へられぬ。久い間のことであるから、

譬^{たと}ひ何^{どの}のやうにものがかはつて居^ゐようと、きつと
衰^{みの}岡^{をか}へ歸^{かへ}らねばならないのである。

彼^かの旗^{はた}本^{もと}に嫁^{かたづ}いて居^ゐて、はじめて紫^{むらさき}が國^{くに}に着^ついた
頃^{ころ}は、まだ三^{だい}代^め目^めの種^{たね}彦^{ひね}が筆^{ふで}を取^とつた、白^{しら}縫^{ぬい}物^{もの}語^{がたり}の
續^{ついで}だの、葛^{かつしか}飾^{もの}物^{ものがたり}語^{がたり}だの、出^でる毎^{ごと}に送^{おく}つてくれた、一
番^{ばん}の姉^{あね}は、會^{あひ}津^つの城^{しろ}で亂^{らん}軍^{ぐん}のなかに髪^{かみ}を被^{かむ}つて血^ちだ
らけになつて最^{さい}期^きを遂^とげたのが分^{わか}り、小^こ倉^{くら}へ行^いつて
は既^{すで}に其^{その}妹^{いもうと}が亡^なくなつて、一^{しゅう}週^き忌^きの法^{はふ}筵^{えん}に列^{れつ}したの
である。また駈^{かけ}落^{おち}をした若^{わか}い夫^{ふう}婦^ふには、四^{こく}國^{こく}でも、
畿^き内^{ない}でもめぐりあはない内^{うち}、去^き年^{ねん}、若^{わか}狭^{かさ}小^さ濱^{はま}の木^き賃^{ちん}
宿^どで、父^{てい}親^{おや}は昏^{こん}々^くとしてうはごとの如^{ごと}く、内^{うち}百^{ひゃく}番^{ばん}の
養^{やし}老^{らう}を口^{くち}吟^{いん}みながら、紫^{むらさ}の膝^{ひざ}を枕^{まくら}に大^{だい}往^{わう}生^{じやう}を遂^とげて
しまつた。年^{とし}紀^きは八^{はち}十^{じゅう}三^{さん}であつた。

残^{のこ}る母^{はは}親^{おや}は七^{しち}十^{じゅう}四^しで、紫^{むら}の打^{うち}明^あけ^あて^あいつたのを聞^き
くと、親^{おや}の年^{とし}紀^きを數^{かず}へては濟^すまないけれど、七^{ねん}年^{ねん}の
間^{あひだ}には見^み送^{おく}り果^はてようと、果^は敢^かないことを、あはれ
にも胸^{むね}に疊^たんで居^ゐたのであつたが、まだ恚^かうやつて
達^{たつ}者^{しや}で居^ゐる。

はじめさへ見棄てられなかつたものを、たとひ良人に誓つたにしろ、七年が九年にならうが、一層年を取つて歩行さへ腑甲斐ないものを一人路傍に棄て、行かれはせぬ。尤もまた婿に對して、今になつて阿容母親がついて行かれる義理ではない。自分は面を被らうと、此は亡なつた金春に對して濟まぬ。と云つて、一人残らうとしては紫が海を渡らうと言はないので、もし自分の為に約束をかへるやうでは、義として此母親は縊れても死なねばならぬ。死ぬのは易いが、それでは折角少い身を、千個寺までして、我慢の父親を見送つた孝の道完からずで、水の泡といふものなり。海さへ渡れば、期日を後れず約束を違へないことの出来るやう、今日此寺まで着いた。来る路でも、母は繰り返して進めるけれども、紫は決しない。でそれならば死なうといはるゝ、死なうと迄いはれては、約束に趣いて母親を棄てねばならず。それはといつて棄てられるわけのものではない。棄てなければ行かれないが、一緒に行つては婿に濟まぬ。これはまた老人の意地で、亡き人の我意は曲ぬといふので、とかうにも決しかねるとのこゝとを、一徹な母親は、其一徹な眼に涙ぐんで長々と岡藏に

お母様の、そして其代りお願だ。嬢様が行らつしやる處まで、丁ど船も漕ぎまさあ、海は座敷も同一で、氣心は知れてます。嬢様がうつくしいたつて、波、風、霧を起すやうな氣まぐれは出しません。きつとあけ方までにや、向うの浦へ漕ぎつけますから、恐れ多いこつたけれど、船のともはさして下さい、私が一生のお願だ。」としみ／＼思入つた體でいつた。岡藏はまた紫を見た時、疊にくつついて平伏した。

紫はぢつと見た。母親は胸に手を置いた。

爾時

聞——是——觀——世——音——菩——薩——即——
時——觀——其——音——聲——皆——得——解——
脱と、朗らかに聞えたのである。

母親は耳を澄まして、

「紫。」

「はい。」

「あゝ、御利益ぢや。お頼み申さう。」

紫はうつむいて、たてこめた室のやゝ暗い、隅

なる床柱とこばしらのしら／＼と艶つやを帯おびて日ひの映えいずる前まへで、
ぢつと思おもひ沈しづんだが、涙なみだぐんだ目めをああげて、畏かしこまつた
岡藏をかざうを嬉うれしげに見みた。

一昨日をとつひは知しらず、昨日きのふの其時そのときの紫むらさきは、けふ此時このとき、
山番やまばんの親仁おやぢが小屋こやの前まへへ、岡藏をかざうにひざまづかれて、
イたいで居ゐるのである。

「え、嬢様、こんなことになりましたしてハヤ申上げやうもござりません。もう亡なつたお方でござりませぬ。お墓まで参りましてもお邪魔にはなりません。で、道々でも歸れ／＼とおつしやるのを、無理におともいたしましたが、これから先は、きつとお許は出ますまいと思ひますけれど、何卒おともをさして下されまし。」と岡藏は手を揉みながら、きづかはしさうである。

紫は目を瞑りながら、横にさした櫛を抜いた、が、見て二ツばかりほつれ毛を掻上げる。

「え、第一、いくらお約束だつたつて、嬢様、もう嬢様、亡くなつた方に何うしてお逢ひなさります。」

と眼を二つて紫の顔を見た。

「唯お墓參を遊ばすばかりなら、何も傍に居たからたつて、差支へはありさうもござりませぬ。お約

束さへ濟みまして、日も違はずにお墓になつていら
つしやる處までおいでなさりましたら、其で佛様も
言句はござりますまいに。摩耶寺にや、母親様がお
いでござりますませ。またお同伴をして歸りたうご
ざります。まあ、お塞參を遊ばして何うなさらうと
云ふ思召で。」

「夫婦の中のことだもの、其はお前には分りませ
ん。」

と紫はあてやかに微笑んだが、ツと其手にして居
た鬢櫛を、呆れる岡藏の手にのせた。

「お目にかゝる時さしあうては悪いから、お前さ
んもうお歸り。そして何かの御縁でせうから、母様
のことを頼みました。またね、摩耶寺のあのお小僧
さんが、フト私の坊やだつたら、母様が治してやつ
た目だ、大事におしツて然うことづかつて下さい、
坊やでなくツても可い、可愛らしい兒だから、心着
けてあげませう。櫛はね、お前さん女房を取つてさゝ
しておくれ。何、またうかゞつてね、おゆるしが出
たら、三年でも、一月でも一日でも、逢に行きます。

と母様は皆御存じだからさう申せば分りますよ。」「
と落着いて静かに然ういつた。紫はいま志のものが、
託して行つた、塔婆に手をかけたが、小さな軽いの
であるから、笈をしよつた立姿で、眞蒼な山をうし
るに、小屋の前の紫囊英を踏んで居ながら、両手に
のせて頂いたが、脇へ落して手に斜めに横へた。

「爺や。」

「え、」とばかり纔に答へた。親仁は目にあて、
居た古手拭を攫んだまゝ、腰を屈めてひよこ／＼と
土間から出る。

「おまゐりをするから。」

「御奇特でござります。」といそ／＼して立ちま
はり、ぶきつちように其の古手拭を克明な帯に挟ん
で、櫛とあか桶とを両手に提げて、

「御新姐様。」

「案内しておくれ。」といひながら紫は、嗚咽し
て手をこまぬいて居る岡藏を見返つた。

「それでは、ね。」

「お、お妨をいたしましては悪うござります。行

つて入らつしやいまし。「といった聲がふるへて、
かゝるあでなる顔の、これが見納だと、最後に一目
見たかつたが、岡藏は顔があがらなかつた。蟲が這
ふけはひのやうな、幽なゆかしい衣の音。薰が細く
縷として、空に靡いて去るやうな心地がして、紫の
遠ざかるのが天窓にありノと響いて、胸を衝いた
岡藏は、あゝ、これがよみぢを歩行く人の跽音だと
思ひ取つた。愚直な親仁は、何か忘れ物があると言
はれたさうで、息を切つて駆け戻つて、探したけれ
ど、誰が紫の其時の心を知らないものがあらう。
岡藏は前後を忘れて駆けつけると、墓間近になつ
た時、蠟燭を啣へて烏が蓑岡山の頂の松へ、ばツさ
り飛んだのを、青葉の間にあざやかに見た。

【完】